



吹田市

# 文化財ニュース

No.22

平成13年3月30日

〒564-0001  
吹田市岸部北4丁目10番1号  
吹田市立博物館  
TEL(06)6338-5500  
FAX(06)6338-9886

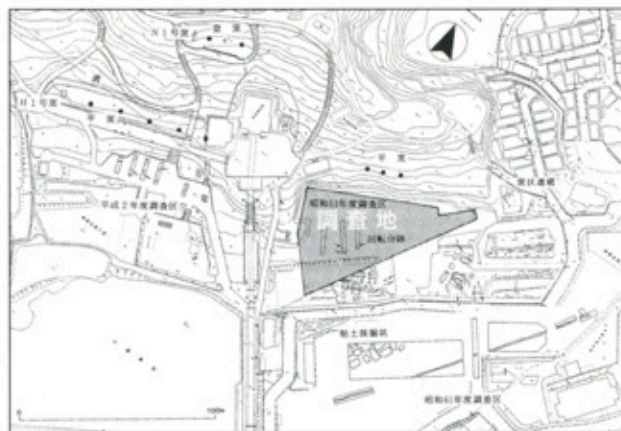
## 吉志部瓦窯跡(工房跡)の発掘調査



▲吉志部瓦窯跡 現地説明会風景

平成12年7月から8月にかけて、吉志部瓦窯跡において発掘調査を実施しました。吉志部瓦窯跡は平安宮で使われた瓦を生産した窯跡です。発掘調査では、瓦製作の工房跡とみられる建物や溝、土坑などの遺構、そして、吉志部瓦窯で焼かれた瓦などの遺物が多数検出されました。

(詳しくは6～7頁へ)



## 平成12年度の主な文化財保存事業



◀ 垂水南遺跡の調査

平成12年度の埋蔵文化財の調査としては高城遺跡、吉志部瓦窯跡、垂水南遺跡において発掘調査を、江坂町3丁目において区画整理事業計画にともなう試掘調査を実施しました。

高城遺跡及び垂水南遺跡の調査は建設工事にとりもなう事前調査として実施したもので、高城遺跡の調査では6世紀代と考えられる大溝、土坑、ピット等が調査され、古墳時代の土器を主

とする遺物が出土しました。

垂水南遺跡の調査では古墳時代前期の土器や杭と考えられる木製品が出土しています。

吉志部瓦窯跡の調査は市民参加で進められている“吹田「風土記の丘」紫金山公園”の計画にとりもなう、予定地内の遺跡の確認調査として実施したもので、造瓦工房に関連すると考えられる溝、土坑や柱穴等の遺構が調査され、瓦等



◀ 江坂町3丁目の試掘調査





▲新たに発見ないしは範囲の拡大した遺跡

の遺物が多く出土しています。

江坂町3丁目における試掘調査では、29ヶ所の調査区を設定し、大半の調査区で古墳時代、平安時代、鎌倉時代を主とする土器等の遺物が出土し、柱穴、溝、土坑等の遺構が確認され、広い範囲に遺跡が展開していることが明らかになりました。

また、市の事業ではありませんが、吹田操車場遺跡において、財団法人大阪府文化財調査研究センターにより、平10年度に実施された試掘調査に続き、初の本格的な発掘調査が平成12年度に行われ、古代の土地開発の状況の一端が明らかにされています。

発掘調査以外にも埋蔵文化財包蔵地域内外において40余件の試掘調査と80余件の立会を行いました。遺跡周辺地における試掘調査により、新たに垂水中遺跡A地点の範囲が拡大し、大阪府教育委員会により吹田操車場遺跡B地点が新たに確認されました。(2月初現在)

埋蔵文化財調査以外の事業としては、文化財調査、文化財保護等のための補助金交付事業等を実施しており、文化財調査は豊津町の稲荷神社に所在する太鼓御輿の調査を実施しました。

また、市文化財保護条例によって指定及び登録された文化財を保護していくために平成12年

度は神境町、西奥町、六地藏3自治会所有の市指定有形民俗文化財である地車及び地域無形民俗文化財に登録された泉殿宮神楽獅子、権六おどり、山田伊射奈岐神社太鼓神輿に対して保存と活用を図るため補助金を交付しました。

市制60周年事業の一環として、市内の文化財をより多くの方々に知っていただくために、文化財の見学に際してのガイドブックとして、「すいた歴史散歩」を吹田郷土史研究会及び大阪府文化財愛護推進委員吹田市協議会の諸先生方に作成していただきました。

その他には、見学に際して文化財等の位置がわかるようにするために吉志部古墳及び吉志部火葬墓の2ヶ所に標柱を設置しました。





## 吹田操車場遺跡の試掘調査



写真1：試掘 No.40 須恵器大甕出土状況（古墳時代後期）



写真2：試掘 No.40 土坑から出土した須恵器大甕



写真3：試掘 No.53 須恵器坏出土状況（飛鳥時代）



写真4：試掘 No.29 土師器羽釜出土状況（鎌倉時代）

吹田操車場遺跡は昭和42年（1967年）に発見されましたが、本格的な調査は平成10年（1998年）に財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した試掘調査が初めてのものとなりました。

調査は操車場内の約2.3kmの範囲に61箇所の調査区を設けて実施しました。

現地は大正8年（1919年）に操車場が建設される際に厚いところでは2m近く盛土が行われ、その上に軌道敷のバラスが敷かれていました。盛土は片山町2丁目付近の山を削ってトラックで運ばれました。盛土の下には、それまでの耕土や床土があり、その下には遺物を含む層があるところと、すぐに地山があらわれるところがあります。

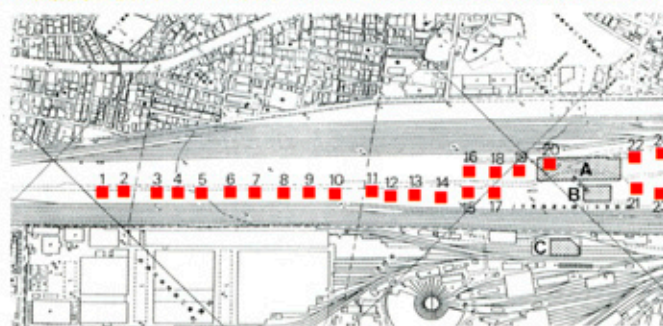
何層かにわたって堆積した土の表面や地山の表面には建物を建てた柱の跡や溝や土坑（物などを捨てたりした穴）などの生活の跡、おそらく墓と思われる穴などが見つかっています。

時期的に見ると、36調査区で旧石器時代の石器や剥片が出土していることが注目されます。キャンプのようなものが付近にあった可能性があります。

縄文時代の遺物は後期の土器片が51調査区で、石器が12調査区で出土していますが、量はわずかです。

弥生時代の土器が30・36・56・61調査区から、石鏃が13調査区から出土していますが、集落は確認されていません。

▼ 試掘調査地点（1～61が試掘調査区番号、A・B・Cは平成12年（2000年）調査区）





古墳時代後期になると、墓あるいは粘土取り穴と思われる密集した土坑(写真6)や、大きな須恵器の甕を据えた土坑などが検出されています。(写真1・2)甕の中には泥田で使う大足と呼ばれる田下駄が入っていました。また、甕底には意識的に穴をあけており、容器の機能を喪失させたうえで据えられていたようで、土地境界の祭りに関連するものである可能性も考えられています。

飛鳥時代になると掘立柱建物や土坑がみつかり、確実に人が住んでいます。(48・51・53・56調査区 写真3・7)

奈良時代になると26~29付近で多量の遺物や掘立柱建物が発見されており、この付近が中心となるようです。

平安時代には生活域が拡大し、2・3調査区付近・16~30調査区・45~52調査区で掘立柱建物が検出されており、3箇所集落が営まれていたようです。

鎌倉時代には、37~39調査区にかけて検出された自然河川の西側(12~33調査区)と東側(42~55調査区)に集落が拡大していきます。(写真4・5)写真5の井戸は2.7~2.9mの楕円形で、多数の鎌倉時代後期の土器ほか、大きなシジミの貝殻やドブ貝、曲物桶の底板、竹串、砥石、鹿角加工製品などが出土しました。

試掘調査で出土した遺物は整理箱(39×59×22cm)60箱ほどですが、先に紹介したもののほかに珍しいものとしては、奈良三彩壺や白鳳期の平瓦、製塩土器・馬歯やシジミ貝殻などがあります。(財団法人大阪府文化財調査研究センター 阪田育功)



写真5: 試掘 No.41 井戸1完掘状況 (鎌倉時代後期)

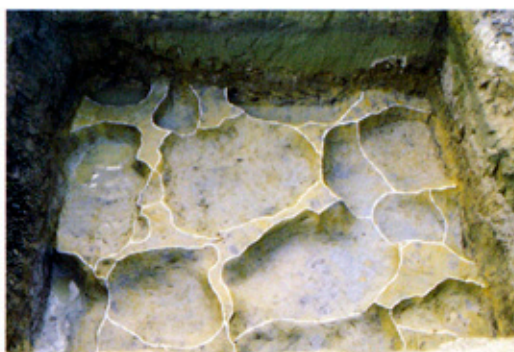
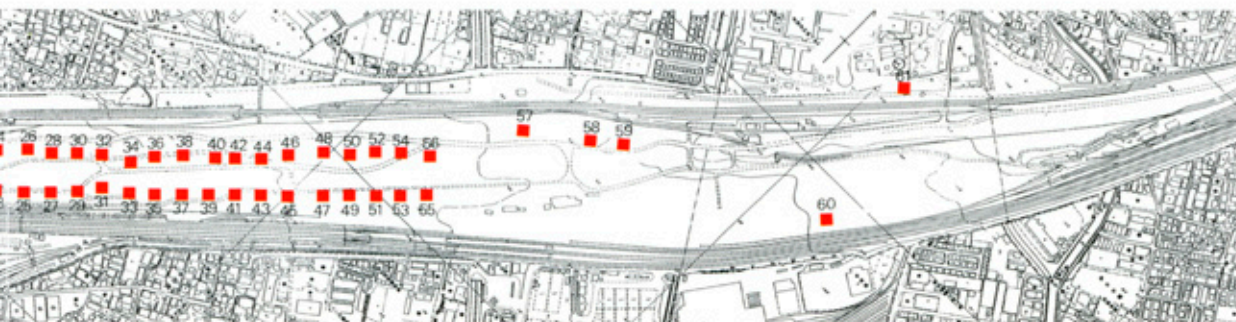


写真6: 試掘 No.57 密集した土坑 (古墳時代後期)



写真7: 試掘 No.51 土坑と柱穴 (飛鳥~奈良)





## 吉志部瓦窯跡(工房跡)の発掘調査

吉志部瓦窯跡は、平安時代初頭に平安宮で使われた瓦を生産した窯跡です。これまでの発掘調査によって、平窯9基、登窯4基が確認されており、その工房跡も検出されています。

今回の発掘調査は、紫金山公園の整備事業にともない実施したのですが、調査地においては、昭和62年に一部発掘調査を行っており、そこでは瓦製作のための回転台跡などの遺構が確認されました。このことから、今回の調査でも工房関連の遺構・遺物の検出が期待されました。

発掘調査は平成12年7月から8月にかけて、9か所の調査トレンチを設定して行いました。そして調査を進めるとともに、吉志部瓦窯で生産された瓦をはじめ、多くの遺構・遺物を検出することができました。

出土した瓦については、主に焼成後の不良品が廃棄されたものと考えられ、そのほとんどは破片でした。その中には、緑釉瓦という表面に



▲調査風景

釉薬をかけて緑色に焼きあげた瓦の破片が1点ありました。また、軒先を飾る文様をもった軒丸瓦の破片も1点検出されました。

この他の遺物としては、吉志部瓦窯操業時期のものと思われる土師器や須恵器、そして奈良時代の須恵器、中世の瓦器や土師器など、やや時代に幅をもつ遺物が認められました。

遺構については、掘立柱建物跡1棟や橋跡と思われるピットの並びが確認されました。そして、この他にも柱穴とみられるピットが多数

▶溝の中に溜まった瓦片





検出され、調査地においては、さらに多くの建物跡が展開している可能性があります。

また、この他に落ち込みや溝などが検出されました。落ち込みについては、その肩部が段をなし、落ち込み内にて建物跡や土坑などが検出されていることから、これはもともと傾斜地面であったところを掘削して人為的に平坦面を作り、その平坦面を利用して建物などが構築されたのではないかと考えられます。また、溝については、落ち込みに沿うような形でのびていることから、斜面上方からの水を排水するなどの機能をもって配置されたのではないかと考えられます。

なお、今回の調査では、回転台跡として明確に位置づけられる土坑の検出には至りませんでした。しかし、いくつかの土坑には、昭和62年に検出した回転台跡とみられる土坑と平面形・大きさなどで類似しているものもあり、それらの中に回転台跡であるものも含まれている可能性が考えられます。ちなみに、回転台とは、瓦を成形するあたり、その作業を行いやすいように、水平方向に回転する作業台を取り付けたもので、回転台跡とは、回転台を支えた木軸を地中に埋設した痕跡です。

さて、これらの遺構については、先に予想されたように、その多くが吉志部瓦窯の工房関連



▲掘立柱建物跡

のものと考えられます。しかし、先述したように、今回検出された遺物の中には、奈良時代の遺物も含まれており、また、吉志部瓦窯操業時より時代の下る遺物も検出されました。そして、平成3・4年および平成7年に実施した都市計画道路工事にもなう発掘調査から、当遺跡では、中世・平安時代後期・吉志部瓦窯操業期・

奈良時代前期・旧石器時代の大きく5時期の遺構が展開しているという成果を得ています。このことから、今回検出した遺構についてもすべてが同時期のものとは限らず、一部で時期の異なるものがある可能性も考えられます。これについては今後の検討によって明らかにしていきたいと考えています。



▲ピット列（柵跡？）



## 高城遺跡第4次発掘調査の概要

たかしろ  
高城遺跡は、高城町・昭和町一帯に広がる集落遺跡です。これまでの発掘調査では、主に平安時代～中世を中心とした遺構・遺物が確認されています。また、旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代の石鏃なども検出されています。

今回の発掘調査は平成12年6月に実施したもので、古墳時代を中心とする遺物とともに、ピットや土坑、溝などの遺構を検出することができました。そして、これら遺構の中には1m以上の幅をもち、約30～50cmの深さを測る大型の溝が1条認められました。

大溝は東西方向にのび、これを中心に他の遺構をみると、大溝の北側においては柱穴をも含むと思われるピットが多数検出されました。そして、大溝をはさんで南側においては溝状の遺構が比較的多く認められました。このことから、ピットの多い大溝北側においては何棟かの建物が展開し、大溝の南側ではそれとは性格の異なる空間が広がっていたということが推測され、大溝はこれら空間を区画する役割を果たしていたのではないかとこの可能性が考えられます。



▲調査風景

しかし、これについては、調査区の範囲に限りもあり、現時点では明確なことはわかりません。

ところで、これらの遺構は古墳時代の遺物ともなう形で認められました。特に、大溝内においては6世紀代の須恵器が比較的多く検出されました。このことから、今回検出された他の遺構についてもおおむね6世紀代に相当するものではないかと考えられます。ただし、遺構の中には重複関係をもつものもあり、ある程度の時期的な幅はあるものと思われる。

以上のように、今回、高城遺跡において古墳時代の遺構・遺物が良好な状況で認められたことは、今後、当遺跡を考える上で貴重な成果を

得たものといえます。特に、高城遺跡の周辺に所在する高城B遺跡や昭和町遺跡などでは、これまで古墳時代の遺構・遺物が良好な形で確認されています。それゆえ、今回の成果は、高城遺跡とそれら近隣遺跡との古墳時代における関係を検討していく上で基礎的な資料になるものといえるでしょう。



▲調査区西側遺構検出状況（中央付近に大溝がみえる）